

## 「村」が学生を教育する

——フィールドワーク手習い記——

庄司 洋子

## 1. 悩みの「調査演習」

履修要項の原稿を書く季節になると、今年はどうしたものかと悩むのが3年次生の必修ゼミ「調査演習」である。テーマをどう設定するか、どこで何の「調査」をすることにするか、年間スケジュールをどの程度具体的に示すか、費用の心づもりをさせておく必要があるかetc. だいたい演習という授業は、やってみなければわからない要素を相当に孕んでおり、なかでも調査演習は、やってみなければの最たるものだから、要項の記述で学生に期待させすぎてはいけない、さりとて、読んで期待が膨らまないようではダメだし、と迷ってしまうのである。

1年次から4年次までの少人数制必修ゼミや卒論指導をセールスポイントにしてきた社会学科が、3年次生のゼミを調査演習とするようになって5年が経過している。この科目は学科の新カリキュラムのいわば目玉であり、学生から徴収する実験料もその多くはここに注ぎ込まれている。大教室での経済効率のよい(?)授業が少なくない

大学教育のなかで、こうした科目を学科に置くことの意義を語るのはなかなか恰好よいものだ。しかし、その裏側には教員の深い悩みもあることを、私は別に隠したいと思わない。つまり、この手間ひまかかる科目を毎年真面目にやり抜くには、相当のエネルギーや知恵が必要であり、かつ、その努力にもかかわらず思ったようにはコトが進まず、学生を失望させる場合もあることを覚悟しなければならないからである。また、数年の実績のなかで学生のあいだにゼミの評価が定まってくると、教員がマンネリ打開のためのテーマや形式の改変に挑戦する勇気をもつことが難しくなる。私自身、あれこれ考えながら後述するようなかたちでこの調査演習を5年間やってきたのだが、この苦労を定年まで毎年続けるのか、と問われれば正直なところ首をひねってしまう。

この演習が狙う「調査」とは何か、というのも簡単な話ではないが、何にせよ調査となればテーマ設定・対象と方法の確定・調査の計画と実施といった一連の作業が欠かせない。また、多少なりとも調査らしい動きをとるため

には経費も必要となり、予算を立てたり精算したりの実務も仕事に加わってくる。そのうえ、ここで教員が行うのは調査そのものではなく、学生に調査の勉強をさせることであるから、教員の責任は、調査にかかわる社会的責任と学生指導上の責任との両者に及ぶことになる。この科目につきまとう重苦しい負担感の根源は、まさにここにあるものと思われる。

ところで、この「授業探訪」のページを、学生の教育に人一倍熱心な書き手と読み手のためのもの、と思っている私には、原稿依頼は正直いって気の重い話だった。日頃の私はといえば、自慢できるほどの授業ができようはずもなく、講義はいつもその日暮らしの準備で不安いっぱい、この演習についても同様である。自分の教育実践を知ってもらい、意見交換し、さらによい実践に結びつけたい、などと前向きに考えてきたわけでもない。むしろ、自分流にやってつい一生懸命になってしまっているだけのものをあまりさらけ出したくない気もする。しかし振り返りの必要も感じているところなので、これまでの調査演習の迷い歩きの状況をなるべくありのままに紹介し、大学における教育について、あるいは演習における学生と教員のかかわりについて、また学外の協力者との関係について、考える素材の一つにさせていただこうと考えている。

## 2. 調査演習の1年間

### (1) 皆瀬村はどこにあるのか

この5年間、私の担当する調査演習では、過疎問題をテーマに掲げ、秋田県南部の皆瀬村という人口3000人ほどの農村に学生が滞在させてもらって、フィールドワークを行ってきた。東京で、皆瀬村を知る人は少ない。率直に言っても、東京から学生を連れていくにはあまりに不便なところである。しかし、東京からかなり遠い（とくに時間距離で遠い）うえに知られてもいないということが、調査演習のフィールドとしてはかなり意味をもっていると私は考えている。

皆瀬村は、JR 奥羽本線の湯沢駅から国道398号線で東方向に約40キロほどの、栗駒高原に向かう山間部にあり、米作地帯であるが小安温泉・大噴湯という貴重な観光資源をもつ小村である。国道沿いに路線バスが走り、奥羽本線の湯沢駅ほかいくつかの駅につながっている。湯沢市（人口3万6千）からは稲川町（人口1万2千）を抜けて皆瀬村に着くのだが、稲川町は、近年つとに知られるようになった「稲庭うどん」と、仏壇で有名な「川連漆器」を産出する旧城下町である。国道沿いに稲川町を出てほとんど村の入口あたりに、郵便局・農協との共同ビルの皆瀬村役場が構えている。皆瀬村の面積の大半は山林で栗駒高原方面にまで延びている。民家のある地域はごく限られ

ており、国道沿いばかりでなく山間のふところ深いところも含めて大小20くらいの部落を抱えている。(ちなみに、豪雪地域に属するこの村の除雪費用は大変なものだ。)東京から皆瀬村へは、奥羽本線のほかに、JR東北新幹線の栗駒高原駅からは車で西に向かうこと2時間半から3時間で役場に着くが、冬期は道路が閉鎖される。県西部にある秋田空港からも、車で2時間以上かかる。こうした位置にあって、皆瀬村は深刻な過疎・高齢化に苦しむ典型的な東北山村の一つであり、秋田新幹線の開通によりいっそう取り残される地域になろうとしている。

## (2)演習をどうすすめているか

私の調査演習では、この皆瀬村でのフィールドワークがハイライトになっているが、当然ながら現地滞在期間の前も後も演習に明け暮れている。ゼミのテーマは、私からも一定の投げかけを行うが、毎年、学生にある程度議論させて決めているので、皆瀬村がかかえる諸問題を越えない範囲でおのずといくつかのグループに分かれていく。私自身の専門的関心からいえばもっと絞り込みたいのだが、それに引き寄せるためにはさらに時間が必要となるので、無理はしないようにしている。

フィールドワークの準備やまとめに要する時間を考慮して、この5年間とも、現地滞在は9月末から10月中旬頃の間で実施してきた。学科のカリキュラム改革の課題にもかかわることだが、

3年次生になるまでの調査法に関する専門トレーニングの現状からいって、フィールドワークの準備・実施・まとめのすべてを1年間のうちに行うことには、正直いって相当の無理がある。現地に行くことばかり考えている学生に、調査の生命ともいえる企画・準備段階の意義を理解させたり、帰京してほっとしている学生にまだ何も終わっていないと気づかせたりする、そうした調査というものの奥の深さを学生に感じさせることを狙うのが精一杯である。

現地滞在中の様子は別記するとして、その前後のすすめかたを簡単にまとめておこう。

### ①フィールドに出るまで

通年の授業のうち、前期全部と夏休み、そして年によっては後期の数週までが、フィールドワークの予備学習と準備作業にあてられる。JRの団体乗車券の手配も忘れると大変だ。夏休み直前あたりには一泊の合宿学習会、夏休み中にグループ単位の自主学習、さらに夏休み明けの現地滞在直前に1日合宿をしないと、間に合わない。後期が始まると慌ただしく現地との連絡、ゼミ内部での打合せを重ねて、間もなくフィールドワーク突入となる。

この期間の重要な学習課題は、調査テーマと視点・仮説と検証方法などを練り上げることと、フィールドワークのための思想と技法に関する基本的トレーニングを積むことである。これが実に難しく、できれば、これを1年目

の課題にして、2年目に実査といきたいところだが、そこまで理想を主張すれば学科カリキュラムは成り立たなくなるのでしかたがない。

前者についていえば、地域・農村・家族・生活構造といった領域の基本文献を紹介し、学生にも探させて、その中から全員で読むものを決める。これまでのゼミの報告書を全員に貸与し、読ませ、コメントさせる。その他、資料として、村勢要覧や地図をはじめとする村から入手したものも配付し、私の研究室にその他の文献・資料が沢山あるので出入りするようすすめる。村制施行100年を記念する分厚い村史などは、はじめは敬遠されるが、だんだん必要に迫られて読む学生が出てくる。こうした中で、テーマ・視点・仮説・方法などが少しずつ固められていく。学習がある程度すすんだ段階で、地域・居住の現実にも目を向けさせるために、自分の居住地の役所の窓口に行き、基本資料をもらったり必要なことを尋ねる経験をさせる。そのうえで、皆瀬村と比較できるようデータを加工して発表させる。これは最初のフィールドワーク訓練になる。

他方で、実際にフィールドワークを行う力をつけるため、調査論に取り組み、ある程度の訓練をしなければならない。なかなか大変なのは、調査といえばアンケートを撒いたりパソコンでデータ処理することだと思いこんでいる学生に、フィールドワークや聞き取りの意味を考えさせることである。調

査の思想や倫理に触れさせ、調査する自分と調査される相手、ことばや関わり、といったことに踏み込まなければならない。調査論の文献を読み、聞くとか書くという当たり前のことが簡単でないことに気づかせる。身近なところで高齢者を見つけて生活史を中心とする聞き書きをさせる宿題を出すこともある。秋田が楽しみ、といっている楽天的な学生でも、こういう勉強をすることで初めて心配になりはじめる。緊張感が高まったところで、フィールドワークの時期を迎えることになる。

出発直前は、いわゆる事前学習のまとめのほか、現地との連絡、謝礼品の購入、資料・消耗品・大学広報誌等をはじめ必要グッズの梱包や宅急便の手配におおわらわである。

## ②フィールドから戻って

皆瀬村から東京に戻ると、誰もが相当に疲労しているが、これからが結構きつい日々である。ノートにも頭の中にも沢山のものが詰まっていた、どう整理したらよいかわからなくなっている。ホットな印象も大切に、村を出て湯沢市内の信号やコンビニに感動したり、東京駅の人混みに腹を立てたりすることが、感想文やテープ記録に残すと面白い。しかし、フィールドで得たことのまとめには冷却期間が必要であり、秋期休業の一週間は実に貴重なものとなる。この期間に、皆で分担して関係者にお礼状を書く。通常のゼミに戻って数週は、とにかく現地で集めた材料を吐き出すために使う。なお、今

年は、テーマに居住地選択・Uターンなどをテーマに掲げたので、初めて首都圏在住の皆瀬村出身者に会うことにした。そこでこの時期に、もう一つのフィールドワークをすることになり、例年よりも忙しくなった。村で紹介された人のほか、10月末に都内で開催された皆瀬会（同郷団体）の総会に数名が参加させてもらい、そこで予約や紹介をもらった人に、各グループがインタビューを行ったのである。11月にはいり、報告書の目次や内容の概略についてグループで出し合って議論しているうち、年末を迎える。年が明けて、報告書の編集体制や分担、印刷所への入稿や刷り上がりに合わせて1年間のゼミの打ち上げの日程を決めたあとは、しばしそれぞれの原稿執筆に向かう。後期の期末試験終了後、各グループは原稿の最終調整を行い、原稿締切りを入試終了に合わせる。編集担当者の作業を経て2月末に原稿が印刷所の手に渡ると、初めてほっとする。例年、3月中旬に完成した報告書を手にしてゼミの打ち上げとなる。報告書は、皆瀬村役場をはじめ、関係者に送付する。

### 3. 皆瀬村でのフィールドワーク

#### (1)村でのすごしかた

5年間、毎年秋に皆瀬村に学生を滞在させてもらって、滞在のスタイルのようなものはほぼ固まってきている。以下、主要な項目別に整理して紹介してみる。

#### ①参加者数（3年次生およびアシスタント）

1年目15名（うち7名は他ゼミの自主参加）+アシスタント1名／2年目19名+アシスタント2名／3年目17名+アシスタント3名／4年目22名+アシスタント2名／5年目13名+アシスタント3名である。悩みはアシスタントの確保で、何とか院生の協力を得ているが、現地まで行動をとるにしてもらっても経費の出所がなく、基本的には本人および教員の個人負担となる。TAなどの制度化が待たれるところだ。

#### ②滞在期間

1年目は3泊4日、2・3・4年目は6泊7日、5年目は私の学内会議のため5泊6日に短縮した。

#### ③宿泊場所

小安温泉郷付近の観光施設エリアに建てられた皆瀬村交流センターがあり、この会議室・宿泊室・厨房などが整った研修用施設のような独立建物を借り切る。一般利用料よりも便宜をはかってもらっている。役場まで、車で20分の距離である。

#### ④食事

1年目は自炊したがこれは過酷。2年目以降、朝食・夕食は、宿泊施設から数分離れた管理事務所内のスキー客用食堂を利用。昼食は、同食堂でおにぎりを作ってもらう。

#### ⑤村内交通

この村のフィールドワークの最大の難問はアシである。路線バスでは、湯沢駅から皆瀬村までも大変、かつ宿泊

施設と役場との行き来もままならない。もちろん、学生には歩けるだけ歩かせるが、送迎しなければ動きがとれないことの方が多い。有り難いことに、隣の稲川町のS氏（うどん販売会社専務・町会議員）が周囲から自家用車を数台手配して無料で貸してくれている。申し訳ないが毎年これに依存し、院生に運転を手伝ってもらう。

### ⑥滞在中の活動

まず、役場で助役や観光課・総務課（財政問題）などからオリエンテーションを受ける。その後、役場内の各課を自由に廻らせてもらい、基本的な聞き取りをする。必要に応じて、再度の聞き取り予約、関係部門への取り次ぎ、村内の役職者や関係者の紹介をしてもらう。小中学校・幼保施設・診療所・福祉施設など、主要な公的機関・施設の見学やグループ別の聞き取りをする。必要に応じて、子どもや高齢者との交流の場を設けてもらったり、行事参加させてもらう。今年、ある部落が自発的に交流会を開いてくれて、役場が紹介してくれるのとは一味違うタイプの人々との出会いが数多くあった。企業・商店や一般村民へのインタビューは、適宜、予約させてもらうことが多いが、ひょんな出会いから話を聞けることもある。電話での予約には学生がとて緊張する。学生は、予定がきちんとしていないことを非常に不安がるが、フィールドワークでは、さまざまなハプニングへの対処が要求されることを学んでいく。土地のアクセントや

なまりは、初日は役場の職員の話さえ書き取れないほどでも、だんだん慣れて3日目くらいになると平気になるようだ。観光エリアの一角にある青年の家を借りて開かれる最後の夜のコンパには、村長・助役・観光課長をはじめ役場関係者や、一般の村民に来てもらう。毎晩、深夜までミーティングやノート整理ばかりしていた学生が、初めて思い切り飲むビールや地酒の勢いで、自信をもって土地のことばの会話に参加する。

滞在中、原則的には、学生がなるべく自由に動き廻れるよう配慮しているが、2年目には内容的に欲張って、別の学術研究グループによる国際化意識の都市・農村比較調査（サンプリング調査）の調査員を、東京区部と皆瀬村との両方で体験する、というおまけを加えた。見知らぬ人に対する都会人と村人との対応のちがいがよくわかり無駄ではなかったが、大いに疲労した。また、村の生活に参加する楽しみとして、3年目は田んぼでの稲刈り実習、4年目はライスセンターでの米袋の詰め込み・運搬作業や皆瀬更生園（村内の障害者施設）でのボランティア、5年目は植樹祭での山の斜面への植樹作業をさせてもらった。また、毎年最終日には、付近へのちょっとした観光を楽しんでいる。貴重な時間のなかでこれがいいかどうかとも検討課題の一つだが、役場の関係者からは、村でもっと楽しんでほしいと言われて、それに乗っているという感じだ。

## ⑦教員の役割

協力を仰ぐ現地の人々との関係の維持は教員の最も大きな仕事だが、それは滞在期間中というより通年の仕事である。当然、設定した時期に私自身が現地に行けなくなるような事態を絶対招いてはならないという緊張がある。しかし滞在中は、現地の人と挨拶を交わすほかには、私はなるべく何もしないようになっている。アシスタント院生に細々と気配りしてもらい、私は彼らと同様に車の運転をして学生サービスをするほかは、学生があまり頑張すぎないように見張りながらブラブラしているのだ。もちろん、何かが起これば私の責任だから、覚悟だけはしている。

知らない人に自分から声をかけ、話をしてもらう勇気を出すことで、日々変化していく学生を眺めるのは面白い。アンケートをしたいとか、とにかく多くの人に会って聞かなければならないと思って焦る学生には、じっくり土地のことばに耳を傾けるように促す。都市的業績主義に毒されている学生には、ふと山をみたり、自分の足で歩いてみたりすることを忘れないように、と声かけをすることが必要だ。

## ⑧費用

大学会計のルール上、実験料の用途にはいろいろ制限があって悩まされることもあるが、この調査演習は実験料なしには成り立たない。通常の演習にくらべると、遠隔地への移動や滞在、相手への謝礼が大きな負担となる。も

ちろん実験料ですべての経費をカバーできないので、残りは学生に自己負担させている。自己負担は2万円近くなる。実験料でカバーしているのは、おもに交通費（特急料金を除く団体乗車券分）、宿泊費、現地謝礼品、報告書印刷費、その他（消耗品費・送料等）であり、自己負担分の用途は、交通費の特急料金（割引がないので大きな負担である）、現地滞在中の飲食費、村内移動のガソリン代などがおもなものである。ちなみに、私個人が事前に打合せのため（時にはアシスタント院生を連れて）現地に出かけるのは、自己負担となっている。

## (2)皆瀬村との出会いとつきあい

教員・研究者仲間からよく訊ねられるのは、一体いつからどうして皆瀬村とのつきあいがはじまったのか、つまり、フィールド探しという難儀をどうやって解決してきたのか、という点である。

ここで、私と皆瀬村のひよんな出会いを打ち明ければならない。実は、皆瀬村は、私の大学時代の友人N氏の実家のある稲川町の隣村であり、たまたま彼のふるさとの話に興味をもった私が稲川町を訪れた際に、温泉があるからと連れて行ってくれたところである。特別な間柄とはいえない彼のふるさとの町や隣村をわざわざ訪ねる必然性が私にあったわけでもないから、不思議な気もするが、縁とはそのようなものらしい。村おこしで頑張っている

過疎の村、という話には心引かれるものがあり、今からみれば私にもフィールドワーカーの素質があったというべきか、私はすぐ村役場を訪ねて、助役や観光課長と親しくなってしまった。村おこしの一環として建設されたばかりの施設が学生の宿泊に恰好なことに目をつけた私は、大胆にも学生の受入れをお願いし、予想以上に順調に話がすすんだのである。その後、私のゼミの学生が毎年村を訪れていることは村に広く知られているが、そのいきさは案外知られていない。今では私は年に数回現地に足を運ぶので、村に親戚がいると思っている人も少なくないらしいが、私は村にとってはもともと行きずりの者でしかない。だから、役場やその関係者や一般の村民が私たちに与えてくれる好意や便宜について、どう考えたらよいのか私にはわからない。つまり、都会ではとうの昔に失われている包容力や人なつこさというものに、情けないが戸惑いを感じないではいられないのだ。反面、この戸惑いこそは、私がこのフィールドワークを続けるための強い動機を与えてくれている。

この村では、先に述べたように、私がほとんど何もしていなくても、村の暮らしや村のことばが学生を教育してくれる。村には、私が教室でどんなに頑張っても伝えられないことを学生にごく自然に伝えてくれる力があり、しばしば学生がその感動や衝撃を表現している。それは、この村が先の見えないう深い悩みを負っており、そのこと

によって村民の感じる力や考える力が研ぎ澄まされているからだと思う。現地では、毎年、この学生はこうだったのか、とびっくりすることが多い。教室の優等生が現地ではあまり元気がなかったりすることもあるが、むしろ私を揺さぶるのは、教室では少々困ったものかどうか考えてるんだろという雰囲気のある学生が、まるで別人のように有能なフィールドワーカーになったりすることである。私が一番心配していた学生が村の人に一番気に入られて、君はずっと昔からこの村にいたような気がするといわれたりする。教員としてはお粗末かも知れないが、学生の思いがけない力が東京の教室では見抜けないのである。学生は、もちろん私が皆瀬村をフィールドにして調査演習を行っていると思っているだろうが、私は皆瀬村が学生を教育してくれていることによりかかって、現地ではブラブラしているのだ。

#### 4. 調査演習のこれから——フィールドワークの手習いを振り返って

学生が過疎ということばからどのような皆瀬村を想像するか、ゼミの始めの頃や準備学習が終わった頃に書かせておいて、実際に現地に行ったあとで自分が書いたものを見てもらうと、たいていの学生はこのことばの暗く冷たいイメージと現実との乖離に驚く。学生が民家を訪問して、お茶や漬物でのおしゃべりがはずみ、先方から、じゃ、今日は泊まっていくか、といわれてど



ぎまぎする、ということも稀ではなかった。今年、ある部落との交流会の別れ際に、村のことはホームステイしなければわからないからぜひ検討するように、といて迫る人達があった。こういうことに出会うたび、この演習の今後について、私の迷いは深くなる。フィールドワークの素人が、次のステップに踏み込むかどうかの分かれ目に来ているのだ。

私はこれまでに、自分の研究領域では、生かじりながらアンケートを配付・回収して量的なデータを読むような調査を色々やってきた。しかし、私の分析用具はおおよそ専門的に高度なものではない。学生に教えるとなると、調査票づくりについては多少の経験からものがいえるものの、データ処理では統計に関する最小限の知識も怪しいし、統計ソフト SPSS の基本的な動かし方にもマゴマゴするレベルである。そこで、この際、教えることは学ぶことの精神なくしては学科の専任教員としての調査演習担当は勤まらない、と蛮勇をふるってフィールドワークの手習いを始めることにしたのである。多少負け惜しみを交えていえば、数字でものをいうばかりが調査ではないぞと学生に語りかけ、自分も質的なデータの意味について勉強し直そうという決意をしたのだ。

農村をフィールドとする調査研究がおおよそ下火になっている今どきの社会学のなかでは、私自身、家族問題や福祉問題を自分の専門にしているという

ものの、都市家族に目を向け、都市部の地域福祉・在宅福祉にばかり関心を寄せてきたといえる。実際、この調査演習を通じてこんなに農村に深入ることになるまでは、私自身、自分のなかにある傲慢な都市中心主義にあまり気づいていなかった。しかし、私が格別の意図もなく初めて皆瀬村を訪れた時に、なぜか突然、大都市の騒音と塵埃にまみれて無邪気に過ごす学生たちにこの農村の日常をまるごとぶつけなければ、という直観がひらめいた。この村が学生の教育という私の仕事を手伝ってくれるような気がしたのだ。そして、なぜ農村か、と聞かれてもいきさつがひよんなことなので理路整然とは説明できないが、農村にこだわることへの意義づけは、少なくとも今の私にはかなりできるようになっている。

しかし、私は、いつまで皆瀬村に行き続けるのだろうか。この点について、現在、私は仲間の手厳しい批判の目を感じ、私自身も内心どうしたものか迷っている。多少なりとも地域調査を手がけたことのある研究者なら、調査の常識として、相手への迷惑ばかりでなく調査者が調査対象に与える影響を考慮して、同じ対象に必要な以上の調査を繰り返す行いを避けるべきだということを知っている。専門家が、フィールドが荒れると表現するこの問題は、私たちがやっているのが調査でなくて調査演習だと言ってみても逃げられるものではないだろう。実際のところ、

私もここでのフィールドワークは3年間という心づもりだったので、3年目を終えた時点でその旨をお礼とともに役場の関係者に伝えた。迷惑を感じていても、先方からは断りにくいだろうという判断もあった。しかし、助役や観光課長の反応は予想外のもので、何か不都合や不満があれば率直に言ってほしいとか、しばらく村の変化をフォローしてもらいたい、というような話になってしまったのだ。私としても、ここで調査論上の問題点を持ち出す気にはなれず、むしろ学生教育の仕事を手伝ってくれてきたこの村や村の人々のことを、少し別の角度から考えるようになった。彼らは、驚くべき謙虚さで、村に対する学生たちの評価を知りたがる。たとえ拙いものであっても毎年の学生の報告書に期待し、身が縮むような失礼な記述があっても、それも参考になったと寛容さを示してくれる。こうして私は、4年目あたりからは、調査論的こだわりを捨てることになり、それゆえに、調査演習の調査とは何かについて少々自信が持たなくなってきたのだ。また、私はこれまで、この授業を通じて、学生に調査とは何であるかを考えさせ、主体的なフィールド調査を体験させるために、私の個人的な問題関心、あるいは個人研究を、ここに過度に持ち込まないという禁欲を守

ってきたが、それについても迷いを感じている。



皆瀬村村制施行100周年記念塔

皆瀬村役場の前には、村制百年を記念する斬新なデザインの石碑が立っているが、実は、過疎・高齢化により釣り鐘状になった村の人口構成を型取ったものだ。深刻な現実への何という率直な姿勢。ふるさとでもないこの村の道の一つ一つを知るようになった私は、この村の変化をもうしばらく見届けて欲しいと言う人達の言葉を受け止め、学生にその意味をこれまで以上に深いところで伝えるべきなのかも知れない。筋道が立たないままに手習いで始めた私のフィールドワークが今や曲角にさしかかっているのを感じながら、いわゆる調査の主体と客体ではなく、調査の実習生と実習現場だけにもとまらない、村と学生との新しい関係をどのように切りひらくことができるだろうか、と考えることしきりである。

(しょうじ ようこ 本学社会学部教授)